

# テイク・マイ・タイム

大阪ガス エネルギー・文化研究所 所長 安達 純

Written by Jun Adachi

## 効率的とユニット

私事で恐縮だが、だいぶ前に町内会の世話役をしたことがある。自宅近くにマンション建設の話が持ち上がり、その動きに対して、地元関係者が集まって、施工側に要望を出していろいろということになった。リーダー役は自治会長にお願いすることにして、メンバーの中では比較的若手の私に、事務局のお鉢が回ってきた。

地元との交渉を早く済ませて建設コストを少しでも軽減したいと思うのは、施工側としては当然のことである。一方、地元側は、早期解決といった考えは念頭にない。景観や生活のペーイスを乱す恐れのあるマンション建設自体が迷惑なのであって、できれば計画を中止してほしいとの思いがベースにある。また、実際に話が進んできた段階でも、マンション建設予定地と自宅との距離により、また年齢やその土地に住む年月の長さ、さらには人生観の違いによって要望の自身が異なるために、話がなかなかまとまらない。地元の中だけでも、合意に達するのは容易ではないのである。

それなら個別交渉にすればよいかというと、それでは交渉力

の低下を招いてしまう。そこで地元だけの会合を何回も開き、話し合いを重ねることにした。やがて本音も出るようになり、要望もいくつかのポイントに収斂し始めるようになった。ここまで来れば、合意までの道のりはあとわずかであったが、それまでに費やした手間や時間は並大抵ではなかった。

ビジネスの世界は、論理や効率が優先するが、地域社会では必ずしもそうではない。考え方や立場を異にする人たちが、自分なりの理屈でそれぞれに納得することが、地域社会でものごとを進めるための大きな条件になるのである。入口のところではじっくり時間をかけなければ、話がこじれて、かえって時間がかかったり、ついには出口が見つからないといったことにもなりかねない。一見して非効率に見えることが、長い目で見れば効率的でありうる世界なのだ。





再認識したこと、そして、そのとき構築できた近隣関係は、その後の地域生活にとって大きな財産になったこと、の二つの意味においてである。

## ●「ビジネス」と「生活」の時間●

それにしても、ビジネスの時間は加速されるばかりである。ますます厳しくなる市場競争で生き残るためには、絶えざるコストダウンと差別化のための技術開発が必要になる。コストダウンも技術開発も、つまるところ時間の節約であり、時間との競争である。節約された時間は、新たな付加価値を生むために消費される。こうしてビジネスの世界においては、常に走り

こうして暫くの間、昼はビジネス、晩と

週末は地域住民としての二重生活を過ごした私は、この二つの世界を流れる時間の速さに、大きな落差があることを身に染みて感じた。いま振り返ると、この経験はたいへん貴重であったように思う。それは本来、生活とは、論理や効率だけでは割り切れない要素を少なからず含むものだという事実を

続けることが必要であり、それも単に速く走るだけでなく、常にスピードアップすること、加速し続けることが求められる。

一方で、生活者の時間はどうかというと、ここでもビジネスの世界と同様なことが起きている。これまで私たちが追い求めてきた「便利で快適な生活」は、私たちに時間的なゆとりをもたらし、そのゆとりは精神的な充足のために使われるはずであった。確かに、便利で快適な生活によって、生存のために費やさなければならない時間は大幅に短縮された。しかし、私たちはそこにどどまらずに、さらなる時間の節約を目指して、依然として忙しい日々を送っている。時間の節約は、もともとは自分を高める手段の一つであったはずだが、いまはそれ自体が目的と化してしまったかのようだ。こうして精神的な充足の方は、いつも先送りされてしまう。

ビジネスの場でも、生活の場でも、時間に追われ続ける私たちは、内心、どこか釈然としない思いがある。こうした時間の節約の延長線上に、真に豊かな生活は実現されるのか、といった疑問さえ抱くようになっていく。

## ●テイク・マイ・タイム●

『スローライフ』は、こうした時間の節約一辺倒のライフスタイルに対する反省から生まれたものだ。これまでとは逆に、「時間をかける」(テイク・タイム)という方向にベクトルの向きを変えることによって、生活の質の向上を目指そうとするものである。

ところで、私どもの研究所の近くに最近、スローカフェなるものが出現した。「SLOW CAFE IN BUSY TOWN」と銘打って、ゆったりとした雰囲気味わってもらおうことを売り物にしているようだ。なるほど、その店に入ると、ファーストフー

ドのチェーン店に比べて時間がゆつくりと流れているように感じられる。しかし、ちょっと待ってほしい。これが私たちの目指すスローライフなのだろうか。スローライフとは、そんなお手軽なものではないような気がする。これまでと同じように、外から簡単に与えられるものであるとすれば、スローライフもまた、他の商品やサービスと同じように消費され、流行の一つとしてあぶくのように、やがて消え去る運命を辿るだけだろう。

例えば、食について考えてみよう。地元や旬の食材にこだわったり、安全や環境問題に配慮したり、食を通しての団欒（コミュニケーション）を重視したりすることは、必然的に時間がかかることなのである。住についても同じように、じつくりと時間をかけなければ、健康で環境にやさしく、真に住み心地のよい住まいづくりはできない。私たちの暮らしには、こうした食や住ばかりでなく、教育や福祉、それに冒頭に述べたような地域社会との関わりもある。そうした生活のさまざまな場面、自らの判断基準を持って、手間ひまかけて取り組むプロセスそのものが、スローライフの中身となるのではないだろうか。

スローライフをこのように、「じつくり自分の時間をかけること」（テイク・マイ・タイム）と捉えるとき、次の三つの難関をどう乗り越えるかが大きな課題になろう。

第一は、自分にどう向き合うかである。足元を見つめ、自らに問うこと。「自分にとってのかけがえのない価値観は何か」と。自分に向き合うのは喜びでもあり、苦しみでもある。

第二は、価値観を異にする他人とどう向き合うかである。効率性は、同質の人々の間を交通整理するためには便利なモノサシだが、複雑で重層的な人間関係においては、決して万能ではない。その場合、何を共通のモノサシとしたらよいのだろうか。

第三は、ビジネスの世界で、どのように「じつくり自分の時間をかける」かである。私自身は、今後ますます成果や効率性が求められるようになるからこそ、じつくり自分の時間をかけることの重要性も同時に高まっていくものと思っている。組織

として、個人として、それをどう確保するかが、ビジネスにとって重要な課題となるだろう。

これも私事だが、週末の定番としていた早朝散歩の途上で、先日、ある体操の集まりに出会った。年配の女性およそ二〇名が輪になって、カセットテープから流れる音楽に合わせてゆつくりと身体を動かしている。門外漢なのはつきりしたことはわからないが、気功あるいは太極拳の一種なのだろう。中でもリーダーと思しき人の動きは、とりわけゆつたりとしていて、見ている方の気持ちもほぐれてくるようであった。あまりに気持ちよさそうなので、少し真似をしてみても、驚いた。「ゆつくり」は、実にむずかしいことなのである。身体の動きを速めるには訓練が要することは誰の目にも明らかだ。しかし、ゆつたりした動きもまた、心の修練を含めて、それなりの訓練を必要とするものなのである。

スローライフにも、同じようなことが言えるのではないだろうか。

